

生は偶然 死は必然

キサーゴータミーという母親がいました。ようやくよちよち歩
きができるようになったばかりの一人息子を失い、悲しみに打ち
ひしがれます。彼女は、息子を生き返らせ、治す薬を求めて
釈尊のもとを尋ねます。釈尊は「一人も死人が出たことのない
家から白いケシの実をもらつてくるように！」と言います。

町中の家々を尋ねたキサーゴータミーは、「ああ、なんと恐ろ
しいこと。私は今まで、自分の子供だけが死んだのだと思つてい
たのだから。でもどうでしょう。町中を歩いてみると、死者のほう
が生きている人よりずっと多い。」と死はどこの家にもあることに
気づかされました。

そこで釈尊が彼女に、
子供や家畜・財産に氣を奪われて

とらわれる人を 死王はさらいゆく

眠りに沈む村々を 大洪水がのむように



と詩をうたいました。

死が、生きる者の逃れられない定めであることを教えられたキ
サーゴータミーは、出家して生死輪廻の苦しみの世界を超えた、
仏の悟りの世界を求めていきました。こうして尼僧となった彼女
に、釈尊は

不死の境地を見ることなしに 百年間も生きるより

たとえ刹那の生であれ 不死の境地を見られれば

これより勝ることはない

と詩をおくりました。

キサーゴータミーと同様、私たちも死を避けて生きていくこ
とはできません。私たちにとつて懐かしい方々のご往生を通して、
私たち自身の命の行き先を見つめ直しませんか。

「お盆」

亡くなられた先人たちのご恩に対し、あらためて思いを寄せる
のがお盆である。

親鸞聖人は仰せになる。

がんど

願土にいたればすみやかに

むじょうねはんしょう

無上涅槃を証してぞ

すなはち大悲をおこすなり これを回向となづけたり

浄土へと往生した人は、如来の願力によってすみやかにさとり
をひらき、大いなる慈悲の心をおこす。迷いのこの世に還り来
たり、私たちを真実の道へ導こうと常にはたらかれるのである。
仏の国に往き生まれていった懐かしい人たち。仏のはたらきと
なつて、いつも私とともにあり、私をみまもっていてくださる。

このお盆を縁として、すでに仏となられた方々のご恩をよるこ
び念仏申すばかりである。 『拝読 浄土真宗のみ教え』より